



現代文学におけるグロテスクな都市生活と神話的田舎

著者	松山 信直
雑誌名	同志社アメリカ研究
号	17
ページ	89-99
発行年	1981-03-20
権利	同志社大学アメリカ研究所
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000008790

現代文学におけるグロテスクな 都市生活と神話的田舎

松 山 信 直

I

日本やヨーロッパの場合と違って、国外から移民が沢山入りこんできたアメリカでは、都市は驚くべきほど急激に発達した。信頼できる統計資料のある1790年を起点とし、20世紀半ばの1950年を一つの目安としてしてみると、この間にアメリカの総人口が393万から15,070万へと約38倍に増加しているのに対して、1790年当時すでに存在していたボストン、フィラデルフィア、ニューヨークの三都市は、どれをとっても、人口増加率において全国平均を大きく上廻っている。¹ すなわち、ボストンは44倍、フィラデルフィアは74倍、ニューヨークは161倍の人口増となっている。また、1790年以降内陸部や西海岸にできた都市の人口増加もすさまじかった。たとえば1850年に人口3万だったシカゴは、百年後の1950年には121倍にふくれて362万の人口になり、1850年に僅か1,600人しか住んでいなかったロスアンゼルスは、1950年には1,231倍の197万の人口となっている。

このようなアメリカの都市人口の急激な増加は、もちろん単なる都市内の人口の自然増だけでなく、様々な原因が重なっていた。たとえば、移民が都市に集中して住みついたとか、開拓が進むにつれて都市が農産物の集散地、商・工業・交通の中心地となったとか、特定の産業・工業の開発に伴う工場・施設の建設・設置がみら

れたことなど、アメリカの歴史的発展に直接かかわる発展が都市に凝集してあらわれたことなどが指摘されよう。従って、アメリカの発展は、フロンティアの開発によるだけでなく、都市の発達にも大きく依存しているという Arthur M. Schlesinger の見方も充分なりたつであろう。²

ところが1950年頃をピークにして、大都市や古い都市の中で、人口増加が停止したり、人口減になるものが出てきた。それは都市中心部の過密化や建造物の老朽化のため、人々が郊外地や衛星都市に住居を移したり、工場や事務所が土地の安くて広い田舎に移ったりしたためであろう。いわゆるドーナツ化現象が顕著になって来たのであった。1950年当時、アメリカには人口50万以上の都市が16あった。そのうち1970年までに人口増加をみたのは、爆発的人口増加をみせたロスアンゼルス（197万から281万へ）とヒューストン（60万から128万へ）の他にミルウォーキー（63.7万から71.7万）の三都市だけで、その他のシカゴ、フィラデルフィア、デトロイト等の12都市では人口が減り、ニューヨーク市がほぼ同じ人口を保っていた。しかし1975年になると、このニューヨーク市の人口も減少していったのであった。

ところが、1950年当時人口15万以上50万までの中都市を見てみると、総数75のうち、1970年に人口が減少した都市は僅か12で、のこりの63

1. 以下の人口統計資料は *The World Almanac and Book of Facts, 1979* (New York: Newspaper Enterprise Ass., Inc.) と *Information Please Almanac, 1979* (New York: Information Please Pub., Inc.) に依る。

2. Arthur M. Schlesinger, *Paths to the Present*, revised and enlarged with a foreword by Arthur M. Schlesinger, Jr. (Boston: Houghton Mifflin, 1964), p. 219.

の都市では依然人口が増加し、その増加率は、全国平均の人口増加率1.35倍を上廻って1.47倍となっている。また人口15万以下の小都市の人口もほぼ同じように増加している。従って、1950年以降、人口50万以上の大都市、巨大都市の人口は、平均的に見れば、横這いか、多少減少気味であるのに対して、郊外都市・衛星都市を含む中・小の都市においては、人口増加は相変わらず進行しており、全国的にみれば都市の発達は今なお続いているものと思われる。

このような発展ぶりを見せる都市に対して、アメリカの文学に顕著な反応がみられることは言うまでもない。特に急激な発達をとげた都市に対しては、古典的と呼ぶのにふさわしい反応が見られたことは周知の通りである。1866年に発表された Walt Whitman の“Mannahatta”という詩は、ニューヨークの中心部マンハッタンの当時の躍動ぶりをうたった賛歌である。マンハッタンは1790年にすでに3万3千の人口を持っていたが、その後、対ヨーロッパを中心とする貿易の門戸として、またヨーロッパからの移民の窓口として、さらにアメリカの経済界の核として、めざましい発展を見せ、1850年に人口は51万にふくれている。このマンハッタンの発展ぶりを、Whitman は彼独特の調子で、繁栄を物語る事物を羅列して次のように表現している。

The countless masts, the white shore-steamers,
the lighters, the ferry-boats, the black
sea-steamers, well-model'd,

The down-town streets, the jobbers' houses
of business, the houses of business of the
ship-merchants and money-brokers, the
river streets,

Immigrants arriving, fifteen or twenty thousand
in a week,

The carts hauling goods, the manly race
of drivers of horses, the brown faced
sailors, . . .³

3. Walt Whitman, “Mannahatta,” in *The City in American Literature*, ed. James H. Pickering (New

彼はマンハッタンの躍動ぶりを表現するこの短い詩を、次のように「わが市よ」と叫んで結んでいる。

City of hurried and sparkling waters! city
of spires and masts!

City nested in bays! my city!⁴

Whitman と同じように、Carl Sandburg もシカゴを「わが市よ」と呼んだ詩人である。シカゴは中西部の経済活動の中心地、交通の要衝として、1850年の人口3万の都市から、1871年の大火にもめげず、1900年には170万の人口を有する巨大都市へと膨張した。Sandburg の *Chicago Poems* (1916年) の巻頭詩である“Chicago”は、当時のシカゴの経済的機能を擬人化した有名な書き出しではじまっている。

Hog Butcher for the World,

Tool Maker, Stacker of Wheat,

Player with Railroads and the Nation's
Freight Handler;

Stormy, husky, brawling,

City of the Big Shoulders . . .⁵

Sandburg はシカゴをたくましい精力的な若者になぞらえ、“Laughing the stormy, husky, brawling laughter of Youth”⁶ と将来を明るく受けとめる楽天的な姿勢をとっているものとして描き出すのである。

ところが、このような賛歌は、特定の都市が急激に発展したある歴史的時期をふまえてなされたものであって、必ずしも都市に対するアメリカ作家の共通の態度を示すものではなからう。むしろ、アメリカ作家の多くは都市をかなり懐疑的な眼で眺め、都市の否定的側面を強調することの方が多かったのではなからうか。⁷ Sand-

York: Harper and Row, c1977), p. 54. 以下の作品からの引用は手近な版に依っている。

4. Whitman, *ibid.*, p. 54.

5. Carl Sandburg, “Chicago,” in *The City in American Literature*, p. 123.

6. Sandburg, *ibid.*, p. 123.

7. Cf. Blanche Housman Gelfant, *The American City Novel* (Norman: University of Oklahoma Press, c1954) (『アメリカの都市小説』, 岩元巖訳 [東京, 研究社出版]); George Arthur Dunlap, *The City in*

burg できさえ、都市に否定的な面——性的享楽、暴力、無法、悲惨——が存在することを忘れてはいない。

They tell me you are wicked and I believe them, for I have seen your painted women under the gas lamps luring the farm boys. And they tell me you are crooked and I answer: Yes, it is true I have seen the gunman kill and go free to kill again. And they tell me you are brutal and my reply is: On the faces of women and children I have seen the marks of wanton hunger.⁸

都市は経済活動、文化、教育の中心であり、一方では、賑い、活気、華やかさ、洗練、上品、歓楽、娯楽、富、名声、さらに時代によっては、高度に発展した機械文明（たとえば、自動車・鉄道等の交通機関、電話、ラジオ、テレビ）と結びつき、人工的明るさ、輝きにあふれているが、他方、これ等の裏面にある極度の貧困、失業、就職難、犯罪、喧騒、狡猾、欲望、利己主義、誘惑、墮落、無秩序、孤独、コミュニケーションの断絶、自然からのへだたりとも結びついていることは言うまでもない。哲学者の Morton White とその妻 Lucia White は、*The Intellectual Versus The City* において、作家を含むアメリカの主要な知識人の多くが、このような都市の否定的側面を重要視し、都市の発展を冷やかに眺め、都市を肯定しなかったことを指摘した。⁹

White 夫妻の考察の対象には、Jefferson から Emerson, Thoreau, Hawthorne, Poe, Melville, Adams, William James, Henry James, Howells, Dreiser, Norris, Dewey, Jane Ad-

dams, Louis Sullivan, Robert Park, F. L. Wright と続く人々が含まれているが、これらの人々の多くは都市に住みながらも繰返し都市に“impersonality”がありすぎる，“genuine communication”がほとんどない、移民が多すぎる、全くの他人が多すぎる、人格の健全で十分な発達のために必要な、顔をつき合わせる人間関係が続かない、等の不満を表明した。¹⁰そしてこのような考察の結果をふまえて、White 夫妻は次のように述べている。

American intellectuals developed conflicting or antipathetic attitudes and created no solid tradition of love for the American city. . . . The celebration of the city was left to chambers of commerce, to boosters and to literary sentimentalists from Dr. Holmes to O. Henry. To the most gifted intellectuals—by literary and philosophical standards—New York was certainly not what London was to Dr. Johnson, what Paris was to a long line of French writers, what Athens was to Aristotle.¹¹

II

第二次世界大戦後の文学作品には、都市を舞台にするものや都市生活を描く作品が非常に多い。ところが、現代作家の眼にとらえられた都市もしくは都市生活は、かなり常軌を逸した奇怪なグロテスクなものであることがある。都市(city)という言葉を表題に掲げている次の三つの短篇は、その点でかなり特徴的であろう。すなわち、Joseph Heller (1923-) の“World Full of Great Cities,”と Donald Barthelme (1931-) の“City Life”と John Updike (1932-) の“A Gift from the City”の三作である。

Heller は 1961年に不条理文学の口火ともなった *Catch 22* を発表した。が、“World Full of Great Cities”は不条理文学ではない。この作

the American Novel, 1789-1900 (New York: Russell and Russell, 1965); 刈田 元司編『都市と英米文学』(東京, 研究社, 昭49)。

8. Sandburg, *ibid.*, p. 123.

9. Morton and Lucia White, *The Intellectual Versus The City: From Thomas Jefferson to Frank Lloyd Wright* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press and The M. I. T. Press, 1962), p. 1.

10. *Ibid.*, p. 218.

11. *Ibid.*, pp. 219-220.

品は、ニューヨークのマンハッタンの高級住宅地ビークマン・ブレイスのアパートメント・ハウスの一室を舞台として、奇妙な「実験」が行なわれようとするを物語る短篇である。¹²

Sidney と呼ばれる16歳の電報配達少年がこのアパートメントに呼ばれた。高価な装飾を施したこの豪華なアパートメントには、テレビの仕事をしている Mr. Ingall とその二番目の妻で Helen という美しい女優が住んでいた。「やせた中年」の夫は、呼びよせた電報配達少年を見て「ひよわ」¹³ だと言い、もっと年上の少年をよこせと言うが、Helen はこの子の方が「少し安全だと思う」¹⁴ と言って、Sidney に特別の用事をたのもうとする。

二人の特別の用事というのは、走り使いなどではなく、実は妻の Helen が少年と性行為を営みたいということであることが分る。この夫婦は金銭的物質的には極めてめぐまれているようだが、何かの理由で非常に「不幸」で、その解決を、二人合意の上で Helen が電報配達少年と性の営みをするによって得ようとしているのである。何が原因でどのような不幸を二人が味わっているのか、作者は具体的には示していない。しかし、二人の間で愛が冷めてしまったのではなさそうだし、二人が少年をなぐさみものにしようとしているのではないことも明らかである。二人はかたくなっている Sidney の気持をほぐすように努力するが、自分達は神経過敏になって、煙草をたて続けに喫ってみたり、酒を飲んだりして落ち着かない。

部屋には Mr. Ingall の息子の写真が飾ってある。Helen によるとそれは Mr. Ingall と前の妻との間にできた子供で、今では大学に行っていて、もう六年もこの家に帰ってきていないという。Mr. Ingall は Sidney に向かって、「彼女はたいへん不幸だ」と言うだけでなく、「われわれ二人は共にたいへん不幸だ」¹⁵ とも言

う。どうやら、二人の不幸には子供が関係しているらしい。二人の間に子供がいない、子供ができない、ということから、見知らぬ少年を呼びこんで、少年の「たすけ」による「実験」¹⁶ を試みようとしているように思える。Mr. Ingall は少年に向かって、「大都市の中で道に迷うのは生き地獄を味わうようなものさ」とか、「人間の心 (mind) なんてものは、人を道に迷わせる大都市なのさ。一生手探をりして、自分がどこに居るのかを知ろうとするのさ」¹⁷ と言って、自分の苦悩を打ちあける。

結果からみれば、Sidney という16歳の少年は、おびえてしまって Helen と満足に接吻することさえもできず、「実験」は失敗に終る。Mr. Ingall は誰にもこのことを言うなと少年に言い、金を与えて帰すことになる。この夫は、広大で、錯綜した街路をもつ大都市を、迷って苦悩している自分達の心の比喩としたが、その一方で、大都市では人がアノニマスでありうることを利用して、妻が無名の少年と性行為を営むというグロテスクな行為を行なおうとしたのであった。また、少年の側からみれば、父が死んだために彼は家を出て“City”¹⁸ で働いていた。彼には女友達もあり、性の経験もない訳ではなかったが、大都市で働いていたからこそ、夫の合意の上で美しい人妻と性行為を営むことを求められたのであった。

どちらの側からみても、この作品に描かれるプロミスキュアスな出来事は、たとえ未遂に終わっても、人々がアノニマスでインパーソナルな関係で生活することが可能である大都市においてこそ起り得るものであった。大都市のグロテスクさの一面がここに描き出されていると言っても言い過ぎではなからう。

一方、「エルザとラモナは錯綜した都市に入った」という書き出してはじまる Barthelme の“City Life”という短篇も、プロミスキュアスな都市生活を描く作品である。都市における私

12. Joseph Heller, “World Full of Great Cities” (東京, 桐原書店, 1976), p. 12.

13. *Ibid.*, p. 4.

14. *Ibid.*, p. 5.

15. *Ibid.*, p. 12.

16. *Ibid.*, p. 12.

17. *Ibid.*, p. 14.

18. *Ibid.*, p. 8.

生活の乱れ、グロテスクな都市生活を描くという点で、この作品も Heller の作品に共通するものがある。しかも、この作品には Heller の作品より以上に、都市生活を田舎との対比の上でとらえようとする city-country のダイコトミーがかなり顕著に意味されていることは注目すべきであろう。

法学生としてニューヨークに出てきた Elsa と Ramona の二人の女性は、同じアパートで同居することになるが、この二人に、次々と男友達ができる。Elsa にははじめ Charles という男友達がいた。Charles がクリーヴランドに職を得て去ると、Elsa は Jacques という男と親しくなる。Ramona はクリーヴランドに去った Charles にラブレターを書いて拒否されていたが、帰ってきた Charles と親しく交わるようになり、Elsa, Jacques, Ramona, Charles の四人の奇妙な関係が展開する。やがて Elsa は Jacques の子供を宿して二人は結婚することになるが、Ramona の方は Charles の他に、シンガー・ソングライターの Moonbelly, 消防隊長の Vercingetorix ともつき合うようになり、そのうち男の子を生む。Ramona はこの子の父親が誰であるとも言わず、ただ “a virgin birth” と答えるだけである。¹⁹

Barthelme は いわゆる伝統的な物語を展開する作家ではなく、幻想的な散文詩風の作品を書いてきた。“City Life” と題されたこの作品も例外ではなく、都市生活のグロテスクな一面をブラック・ヒューマー風に描くのである。Ramona の “a virgin birth” だという話を聞いて、枢機卿が数人あたふたと訪れてきて、“There can't be another Virgin Birth!”²⁰ と言う。法学部の学生は “a virgin birth” と聞いて、姦淫の罪があるかないかについて議論し、St. Augustine を引合いに出して演説する学生も出てくる。“A birth hymn” を考えたシンガー・ソングライターの Moonbelly は “this damn

birth” について想いをめぐらし、“Is this the real purpose of cities?” とか、“Cities are erotic, in a depressing way. Should that be my line?”²¹ などと考え、“Cities Are Centers of Copulation.”²² を書く。このレコードが百万部売れることになる。

Ramona は関係のあった三人の男、Charles, Moonbelly, Vercingetorix の名前を何通りか組みかえて、次のように考える。

「私の上に彼等の眼差がそそがれ、それがすべてとけ合って子供を生む力となったのだ。この都市で生活している数百万の人々の中から彼等は私を選び出し、暗示と恐怖の踊りをはじめたのだ。他にえらびようがあったらどうか。」(大意)²³

Ramona にとって、都市生活は半ば必然的に異性関係の「ぬかるみの道」(muddy roads) となり、都市は Moonbelly の歌のように「性交の中心地」となった。都市について Ramona はまた「私たちは絶妙極まる神秘的汚物(the most exquisite mysterious muck) の中にとじこめられていることを認めなければならない」²⁴ とも考える。

このように、都市における Ramona の生き方をグロテスクとして扱い、彼女の異性関係にぬかるみや汚物の「汚い」イメージを与える発想の背後には、当然のことながら何等かの判断の根拠、基準がある。このノームとは、都市と田舎を対立的にとらえるダイコトミーをふまえたものであって、田舎の生活は美しくノーマルで、都市生活の汚さはないとする考え方である。Ramona はモンタナ州の出身で、両親が田舎から出てきて Ramona のアパートを訪れた時、父は「白いカウボーイ・ハット」²⁵ をかぶっていた。白に清潔・清純の意味があることは言うまでもない。また、母の方はルネ・マグリットのグラビア写真を贈り物として持ってきたが、それは

21. *Ibid.*, p. 164.

22. *Ibid.*, p. 165.

23. *Ibid.*, pp. 167-168.

24. *Ibid.*, p. 166.

25. *Ibid.*, p. 151.

19. Donald Barthelme, “City Life,” in *City Life* (New York: Farrar, Straus & Giroux, 1970), p. 162.

20. *Ibid.*, p. 163.

「三日月を切り抜いた木の絵」で、“It’ fantastically beautiful!”²⁶ と Ramona は叫ぶ。田舎＝清潔、清純、美、都市＝グロテスク、汚い、という図式がここに認められることは言うまでもない。

田舎から来た人や贈り物が、このように田舎を都市生活のグロテスクさ、汚さのノームとして位置づけるようなイメージを与えられているのに対して、田舎出身の人にとって都市からの贈り物とは何であろうか。その奇怪さ、グロテスクさを描くのは John Updike の “A Gift from the City” である。

この作品は、ニューヨークに住んで市内の工業デザイン・包装デザインの会社につとめる James 夫妻の許に奇妙な黒人が訪れてくる物語である。この黒人は応待に出た妻に、ノースカロライナから七人の子供を連れてニューヨークに出てきたが、金に困っているの何か仕事をさせてもらえないかとたのむ。さし当ってやってもらえないような仕事もなかったの、妻は10ドルを施すことにした。この若くて身なりの良い小柄な黒人は、10ドルの施しに感謝し、礼を言うために御主人に会いたいと言う。再び訪れてきて夫 James と会った黒人は、仕事も見つかりアパートも借りることができたが、仕事は月曜日からのことで、この週末は家具も食べ物もないまま過さなければならぬと言う。そこで James はさらに20ドルを与え、妻が渡した10ドルと合わせたこの30ドルは、「市からの贈り物」²⁷ だと考えてくれという。そして、黒人が帰る時には、食べ物を紙袋に入れてやり、さらに帰りの交通費だと言って、1ドルばかりの小銭と地下鉄のトークンも与えてやるのである。

黒人の話が果して真実なのかどうかについて、作者は断定的なことは何一つ言っていない。黒人は小柄で、丁寧な物腰なのだが、James から20ドルの施しを得た時には、大げさに泣こうとさえするし、お礼のために自分の妻と七人の

子供を連れてきて、洗濯など何なりとしたいと言う。しかし、この黒人はノースカロライナからトラックに乗せてもらってニューヨークに来たと言うのには、服装が立派すぎるし、ノースカロライナでの賃金の話も真実とは言い難い。黒人が James に会って礼を言いたいというので訪れてきた時、James 夫妻は映画を見にいて不在だったが、黒人はタクシーで彼等の家の前まで乗りつけて、その料金のことで運転手ともめ、警察にまで行っている。ところが、警察で何があったのか全然分らない。要するに、この黒人は危害を与えるような恐怖としてではなく、得体のしれない詐欺師まがいのグロテスクな人物として描かれているのである。

のみならず、この得体の知れない黒人の話を聞いて、さらに20ドルを追加して与えた James の行為も、異常なものであったと言わねばならない。というのは、ニューヨークに出て住んでいる彼の意識には、ある偏り、ある歪みがあった。ミネソタ州のオントーク出身の彼にとって、ニューヨークでの生活はあまりにも順調であった。デザインの仕事もはかどり、収入もよく、子供も生まれて、家庭的にも幸せであった。そこで何かシッペがえしがあるに違いないと彼は考えるようになっていたのである。「けわしいバビロニアの山々のような表面を持ち、真昼に濃い影をたたえ、信仰なき数百万の人々をかかえたニューヨーク市そのものが彼におそいかかってくるのではなからうか、という疑念が増していった」²⁸ のであった。だから、妻が黒人が訪れてきて10ドルを与えてしまい、手許に現金がなくなったことを夫に告げようと電話をかけた時、「恐ろしいことが起ったのよ」²⁹ と切り出した妻の一言を聞いて、James は一瞬妻と幼い子供が、十代の若者か浮浪者か石炭屋に襲われたかと想像してしまう。また、映画を見た帰りに、二人が並んで歩いているのをじろじろ見返す人々の眼付が James の気に入らない。妻に向って「(人をじろじろ見るのを)止めるよ。お

26. *Ibid.*, p. 152.

27. John Updike, “A Gift from the City,” in *The Same Door*, “Crest Book” (Greenwich, Conn.: Fawcett Publications, 1964), p. 134.

28. *Ibid.*, p. 125.

29. *Ibid.*, p. 122.

前のために俺がナイフで刺されるよ」³⁰とも言う。

ミネソタ州から出てきた James は、明らかにこのニューヨークにおける幸福のために、いやが上にも都市を脅威としてうけとめていたのであった。彼にもやはり都市と田舎のダイコトミーがあり、彼の意識では、田舎は平和・平穏であるのに対して、都市（ニューヨーク）には思いがけない危険や暴力沙汰がひそんでいるかもしれないのであった。彼がそれまでに物乞いをする人に施し物を与えていたのも、善意の行為というよりは、都市の無言の脅威に対する免罪の意図が強かったと解することができる。この作品の冒頭には「この（ニューヨークという）都市の神秘」³¹という表現がある。訪問してきた得体の知れない黒人は、たしかにこの都市の不可思議のあらわれだった。黒人は決して施しを強要したのではないし、また恐怖を感じさせる人物でもなかった。妻よりも小柄で、物腰は丁寧だった。James 夫妻は黒人の訪問を直接の脅威として受けとったのではなく、都市の脅威の免罪行為の機会と考えたのであった。

月曜日から仕事につくと言っていた黒人は、その月曜日に再び James の家を訪れてきて、家にいた妻に、ベッドを売ってくれると約束した人が、もう10ドル渡さないとベッドをくれないと言っている、と告げる。妻が月曜からの仕事はどうなったのかと問いただすと、水曜からだとか言い、妻がもうお金は全部あげたので一ドルも残っていない（事実、夫が現金を全部持って行ってしまった）と言うと、黒人はそれを予期していたかのように大人しく立ち去っていった。「その後二人はこの黒人を見かけることもなく、二人の幸福はもどった」³²と作品は結んでいる。妻が施しをこぼんだことによって、つまり、免罪行為を止めることによって、逆に彼らが感じていた脅威も消えてしまったのである。

James はこの黒人に与えた金を「市からの贈り物」と言ったが、実はこの黒人の訪問こそ、田舎から出てきて都市で幸福に住んでいるために意識の歪みをみせていた James におくられた、たいへんグロテスクな奇怪な都市からの贈り物であったと言うべきであろう。

III

アメリカの歴史と文化を説明するに当って楽園神話を持ち込むことは、一種の流行となった感がないでもないが、ピューリタンの丘の上の市から今日に至るまでの社会的・政治的变化を説明するに当って、楽園神話が有力な包括的機能を果していることは否定できない。Charles L. Sanford の *The Quest for Paradise* は、このような楽園神話によってアメリカの歴史と文化に光をあてようとする書物の一つである。この書物の序文で彼は「エデンのイメージは、耕作された自然という静的な農業中心のイメージでもなければ、これに対立する荒野のイメージでもなく、両者のイメージを包括しながら、この二つのイメージをその他の価値とダイナミックな関係に位置させるものである」と述べ、「エデンの神話は、アメリカ文化の中で最も強く、最も包括的な組織力であったように、私には思える」と書いている。³³

アメリカの楽園思想は、時代が進むにつれ、実現をめざす努力目標としての楽園のイメージとは全く正反対の現実をつきつけられて、歴史的現実を離れた郷愁、理念、信念といった複雑な形で、アメリカ人の意識の中に生きて行くことになった。おそらくこのことを最初に指摘したのは、Henry Nash Smith の *Virgin Land* であろう。Smith によれば、19世紀にはミシシッピー・ヴァレーの未来社会で支配的な力となっていくのは農業であろうと思われていた。ところがそうはならなかったことについて、Smith は次のように述べている。

「時間が経過していくにつれて、この農業と

30. *Ibid.*, p. 128.

31. *Ibid.*, p. 122.

32. *Ibid.*, p. 141.

33. Charles L. Sanford, *The Quest for Paradise* (Urbana, Ill.: University of Illinois Press, 1961), p. 4.

いう象徴は、『未開の西部』という象徴と同じように、商業と工業によって変貌していく社会を正確に描きだすことを次第に止めていった。さまざまな新しい経済的技術的力、ことに、川船と蒸気機関車の形をとって働くことになった蒸気による動力、が仕事を行なうようになった時、楽園はもはや楽園ではなくなってしまった。ところが、西部の農業楽園のイメージは、もっと以前の素朴で幸福だったと信じられていた社会状態について人々が記憶していることを、具体的に表現するものとして、アメリカの思想と政治の中に一つの力ある存在として長く生き残ったのであった。³⁴

また、1890年頃から第二次大戦までを改革の時代と見た Richard Hofstadter は、*The Age of Reform* の第一章「農業神話と商業の諸現実」の中で、19世紀が終りに近づいて、農耕社会が商業化していけばいくほど、「この社会は、想像の世界の中で、非商業的な農耕的価値にすぎりつく理由をいっそう見出した」と述べ、「農耕神話は時がたつにつれて、いよいよ虚構のものとなっていった」と言っている。³⁵

すでに見たように、先に考察した作品においては、田舎から大都市に出てきた人々の都市における経験や都市生活のグロテスクさ、汚なさに対して、田舎は清潔で、清純で、美しいという含蓄があった。田舎は都市のノームとなっているのである。これは都市化の傾向がたえず進行しているのにもかかわらず、いや、むしろ、それ故に、と言った方がよいかもしれないが、田舎が、農業楽園の神話の延長線上にあるものとして、非常に微妙な形でアメリカ作家の意識・思考の中に入りこんでいることの一つの証左であろう。もちろん、田舎・田園といった概念は極めて漠然とした意味合いしかもたないことは事実である。しかし、時代と場所が変わっても

田舎の生き方にある種々の概念が集められ、ある種の価値がそこに与えられて、田舎は一連の状況や概念や価値や信念、理念の複合体となった。そのような田舎は、神話的農業楽園の現代版とも言うべき神話的田舎と呼ぶことができるのではなかろうか。

先に考察した作品に関する限り、神話的田舎は必ずしも農業と直接結びついた訳ではなかったが、Anselm L. Strause が描いてみせる田舎とは、このような神話的田舎と考えることができる。

田舎の生活はゆっくりとしていて、急ぐことがない。人々は自然に則した豊かな生活を送る。田舎の人々は親しみ易く、彼等の人間関係は、ざっくばらんでありながらも、規律は守られている。農業に従事する人々は、人種的に多様であっても、習慣・文化の上で同質的である。日々の生活は安定していて、社会は宗教的で、道徳的で、正直である。従って、人々が純粋に個人的な衝動にかられて行動することはない。すべての農民が互に愛し合っているとは言えないにしても、彼等は少なくとも互に理解し合っており、都市居住者のように、互にあやつったり、食い物にしたりすることはない。身体そのものがおかれている環境は、健康的で、家庭的で、落ち着きがあり、人がうようよしていることもない。その一方では、田舎の人はたくましい民主主義論者で、彼の信念は、自然そのものとの接触と、クラッカー樽をかこんで交したり教会で交したりする平等主義的議論に接することによって、育成されたものである。³⁶

もちろん、特定の田舎や田園生活が、ここに列挙された特色のすべてを持ち合わせているとは限らないし、また逆に、現実のある田舎の特色は、ここに指摘されたことに留まらないとも言えるであろう。また、Strause 自身が認めているように、上記の田舎の特色のうちのあるものは、フロンティアの様々な条件のうちから

34. Henry Nash Smith, *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth* (New York: Vintage Books, 1957), p. 139.

35. Richard Hofstadter, *The Age of Reform: From Bryan To F. D. R.* (New York: Vintage Books, c1955), p. 24.

36. Anselm L. Strause, *Images of the American City* (New Brunswick; Transaction Books, c1976), p. 108.

発展してきたものであるし、また、南北戦争後都市のひどい条件に反対して展開してきたものもある。³⁷しかし、先に述べたように、一連の状況や概念や価値・信念・理念の複合体としての田舎は、White が指摘したアメリカの知識人の都市に対する不満や、先に考察した作品の都市生活のグロテスクさ、汚なさの対極になっていることは認められるであろう。少なくともこのような神話的田舎をノームとして、都市生活のグロテスクさ、汚なさ、不気味さ、不可思議さが描かれていることは言うまでもない。

Shirley Jackson が書いた“Pillar of Salt”という作品は、都市の背後に上に見たような神話的田舎の存在を明確に設定して書かれた短篇である。この作品は、主人公が田舎から大都市（ニューヨーク）に出てきて数日間滞在する、という設定を持っていて、神話的田舎と都市の対比が見事に押えられている。主人公は田舎から出てきて、都市の否定的な面にさらされ、精神的に不安定になり、パニック状態に陥って行動ができなくなってしまうのである。

ニュー・ハンプシャーの田舎に住んでいる Margaret は、夫と共に、かねて計画していた二週間のニューヨーク訪問に出かける。ニューヨークのアパートに住んでいる友人が休暇をとるので、そこを借りることにしたのである。田舎に残していく子供たちや留守宅の心配も消え、二人はさまざまな期待に胸をふくらませてニューヨークにやってくる。友人のアパートははじめてであったが、「これが二週間の家だ」と言った夫の言葉には、何の違和感も不安感も感じられなかったし、窓越しに向いのアパートを眺め、眼下の街路を見た Margaret は「すばらしいわ」と言い、「うれしいわ」³⁸とも言う。

ところが、数日のうちに経験したことから、Margaret にはニューヨークに対して不満や不安がつのり、違和感が生じてくる。買物にいても、品物の種類や値段が気に入らない。子供

のみやげにと思ったおもちゃも、現金レジスターだとか電話だとか、親の文明生活に子供を早くから適合させようとする「小型の機械文明」³⁹でしかない。バスの満員の乗客は、「通して下さい」⁴⁰という彼女の言葉を聞いてくれず、彼女は降りるべき停留所で降りることができない。

彼女に決定的な打撃を与え、パニック状態に陥し入れたのは、火事騒ぎとバラバラ死体事件だった。友人のアパートでのパーティーの席で Margaret は下の街路の騒ぎに気付いて、隣の人に知らせるが、その人は「ここらあたりではいつも殺人があるんですよ」⁴¹と行ってとりあわない。それは実は火事だったのだが、パーティーに出席している人々は、「家が火事ですよ」⁴²といっても誰も耳をかそうとしない。恐慌状態にとりつかれた彼女は、一人で階段をおりて街路にとび出してしまう。火事は二軒隣りのことであった。

また、Margaret が夫と連れ立ってロングアイランドの別宅にいる友人を訪れた際、海岸でバラバラ死体の足がみつかるが、その話をして腕が流れついた記事を新聞で読んでいたその主人は、一向に驚きもせず、「よくある殺しの一つですよ」⁴³と事もなげに言う。ショックを受けて市内に帰った Margaret は、この事件を気につけないと自分に言いかけさせるのだが、すでに彼女の精神には変調が生じていて、眺めていた向い側のアパートの窓枠が砂のようにくずれていくように見えたり、建物がゆれるような幻覚が起ってくる。気分転換のつもりでタバコを買いに出るが、下におりるエレベーターが早くおりすぎるように思えて、彼女は恐慌状態に陥ってしまい、ドラッグストアのある向い側に渡ったものの、帰りには車が恐ろしくなって歩道の車道側を歩くことさえもできないし、横断歩道でさえ渡れなくなって立ちすくんでしまうのである。

39. *Ibid.*, p. 181.

40. *Ibid.*, p. 180.

41. *Ibid.*, p. 179.

42. *Ibid.*, p. 180.

43. *Ibid.*, p. 184.

37. *Ibid.*, p. 108.

38. Shirley Jackson, “Pillar of Salt,” in *The City in American Literature*, p. 178.

この作品の表題“Pillar of Salt”は、旧約聖書『創世記』19章で、神が墮落したソドムとゴモラの町を滅した時、神の命に反して後を振りかえって見たロトの妻が「塩の柱」になった、とされていることに由来している。横断歩道が渡れなくて立ちすくんだ Margaret を、「塩の柱」になぞらえていることは明らかであるが、彼女が見たニューヨークそのものが、神にほろぼされたソドムとゴモラになぞらえられていると言ってもよからう。

しかし、ここで問題になるのは、このような聖書的タイポロジーではなく、Margaret がニューヨークにおいて陥ったパニック、グロテスクな幻覚や、意志と行動の不調和等は、都市と田舎のダイコトミーから生じており、Margaret の精神に変調を生じさせるほど、都市そのものの方が異常であり、歪んでいる、ということである。

彼女のニューヨークのうけとめ方は、田舎をすてて出てきた人、都市を自分の人生の場として受けとめ、都市生活に適合しようとする人の受けとめ方とは違っていた。田舎の日常生活に埋れていた Margaret にとって、ニューヨークは憧れの土地、いわば神話的理想郷であった。ニューヨークに出てきた当初、彼女は上に見たように、この大都市を「すばらしい」と思った。ところが、それが逆転してしまったのである。田舎は一時的に去ったものの、依然として彼女のよりどころであった。彼女の価値観、親密さの意識、安定感、田舎にあった。従って彼女はなじみの感じや家庭的な感じを与えないものに対して、また、逆に、不安や不満や心配や孤独感や異和感を与えるものに対して、意識的・無意識的に拒絶反応を示したのである。火事や殺人といった事件だけでなく、このような事件を日常のように受けとめて特に深い関心を示さない都会人の感覚の麻痺、他人に関心を払わないバスの乗客や通行人やドラッグストアの店員の冷淡さ、子供のおもちゃにまで浸透した機械文明、自然とのへだたり（ロングアイランドの海岸に出た時には「海岸は彼女をよろこばせた。

妙になじみがあって安心できた」⁴⁴とある)、横断者を無視する激しい車の動き、その他、雑踏、雑音、商品の種類と価格など、Margaret が不満に思い、不和・異和感を感じ、拒否したいものは数多く重なっていた。この短篇は、このように、都市における心理的拒絶に原因する Margaret の幻覚やグロテスクな行動を描くのだが、彼女の都市拒絶の根拠は田舎であった。その田舎は、もはや彼女が細々したことに気を配って立働いていた日常的な田舎ではなくて、彼女の意識や行動をグロテスクにしてしまった都市や都会人の方がグロテスクなのだ、という判断の根拠となる神話的田舎なのである。

IV

先に述べたように、Morton White 夫妻が考察したアメリカの主要な作家や知識人は、都市を積極的に称揚するよりは、否定的、懐疑的、批判的に見てきた。しかし、近代化が進行し、都市化が避けられなくなった現代の作家達は、単に都市を否定し、田舎を指向することはできない。たしかに、ここにとりあげた作品では、主人公が程度の差こそあれ田舎とかかわり合いを持っていることになっていて、すでに論じたように、都市生活のグロテスクさをグロテスクだといえるノームは田舎にあって、都市のグロテスクさを描く作家達の発想には依然として農業楽園の神話が生きているといえる。けれどもこのことは、都市の放棄、田舎への退行を意味するのではない。神話的田舎はあくまでも神話であって、都市のアンチテーゼとして実現されるべき理想世界の青写真となっているのではない。避けられなくなった都市生活を送っている現代人に、作家たちが都市生活のグロテスクさを描いた作品をつきつけるのは、都市生活のグロテスクさを感じとる感覚の復権のためではなからうか。都市生活が日常化することによって異常なものを異常として受けとめたり、また、グロテスクなものをグロテスクとして受けとめ

44. *Ibid.*, p. 183.

る感覚を現代人は喪失してきたのである。これらの作家たちは、都市と田舎のダイコトミーをふまえた作品を発表することによって、都市生活を送っている現代人に向って、グロテスクなものをグロテスクだとして受けとめる感覚の復権を叫び、その感覚のよりどころが何であるかを示そうとしているのである。言ってみれば、彼等は都市における正常な人間性の復活をめざすヒューマニストであって、そのために、神話的田舎をふまえて都市生活のグロテスクさを描き出す作品を書いたのである。

しかし、その一方で、これらの作品では、都市生活のグロテスクさ、奇怪さ、汚さが、巨大に、センセーショナルに拡大され、誇張され、歪められているのではないかという疑念も拭い切れない。文学が示す真実は必ずしも客観的に立証可能なものではない。従って、そのような疑念が入りこむ可能性はかなり高いと言わなければならないであろう。ことに Heller や Barthelme の描く都市生活は、カリカチュアと考えられるほど、現実の都市生活から遠くへだたっているとされるかもしれない。このへだた

り、センセーショナルとも思われるほどの誇張は何を物語るのであろうか。都市のカリカチュアを描くということは、神話的田舎の対極に、否定され拒否されるべき特色を持ち合わせた神話的都市を彼等が意識していることを意味するのであるか。それとも、anti-city（反都市）が類型化してしまっているのであろうか。

この小論は、都市や都市生活を扱った作品を網羅的に考察することを目的とするのではない。従って、今ここで性急に結論を出すことは許されないであろう。しかし、はじめに述べたように、都市化が依然として進行している今日のアメリカにおいて、神話的田舎のイメージが作家によってますます強く意識される一方では、反都市が戯画化され、虚構化され、誇張されて、神話的の反都市のイメージができつつあるのではなからうかと思れるのである。このことは今後の課題として付記しておきたい。

（この小論は「現代アメリカにおける都市文明の特質についての一般的研究」〔科学研究費一般研究（B）、昭和52-54年度〕の研究成果報告に加筆訂正したものである。）